



館長だより

山形県産業科学館

令和8年1月12日(月)

発行 館長 加藤智一

空飛ぶ家元が茶の湯に託した平和への祈り

今早朝、NHK アーカイブス「あの人に会いたい」という番組で、昨年の8月14日に102歳で逝去された、裏千家十五代家元・千玄室大宗匠が放送されていました。彼の平和への想いと行動に、感動しました。以下にその内容を紹介させていただきたいと思います。

裏千家十五代家元・千玄室大宗匠は、「空飛ぶ家元」と呼ばれました。世界七十カ国以上を飛び回り、国連やバチカン、戦争の記憶が刻まれた地で献茶を行い、各国の要人に一服の茶を差し出しました。その行動の根底には、単なる文化交流を超えた、深い平和への祈りがあります。彼がなぜそこまで茶の湯に平和を託したのか。その原点には、若き日の戦争体験がありました。彼は、同志社大学在学中に学徒出陣で海軍に入隊し、特攻隊員として出撃命令を待つ身でした。仲間たちが次々と飛び立ち、二度と戻らない姿を見送るたび、胸の奥に重いものが積み重なっていったと言います。京大出身の戦友が「生きて帰れたら本物の茶室で茶を飲ませてくれ」と語った言葉は、彼の心に深く刻まれました。しかし、その友は帰りませんでした。終戦を迎えるまで、生きて帰った自分を抱きしめて泣き崩れた母の姿を見たとき、彼は「仲間たちも本当はこうして帰りたかったんだろう」と思ったそうです。その思いは、生涯消えることのない痛みとなり、同時に「二度と戦争を起こしてはならない」という強い誓いへと変わっていきます。

戦後、進駐軍の兵士に茶を点てた経験が、彼の平和観を大きく形づくっています。国籍も宗教も異なる相手が、一椀の茶を前にすると、ふっと表情が和らぎ、互いに心を開いていく。茶室には上下も勝敗もない。あるのは、相手を敬い、心を通わせるための静かな空間だけである。彼はそこに、戦争とは正反対の「和」の力を見いだしました。彼が掲げた言葉に、「一盃（わん）からピースフルネスを」があります。一椀の茶が、世界の平和につながるという思想です。茶の湯の根本には、「どうぞ（After you）」という精神があると彼は語っています。相手を思いやり、譲り合う心があれば、争いは生まれない。茶室で交わされる静かな所作の一つひとつが、平和の実践であると彼は考えたのです。

彼は、茶碗を「緑の地球」にたとえます。茶碗を両手で包み込むように持つ姿は、地球を大切に抱く人間の姿に重なるのです。茶を飲み干すとき、人は

自然と心を静め、感謝の念を抱く。そこにこそ、平和の原点があると彼は説きました。茶の湯は単なる作法ではありません、人間が本来持つべき「和の心」を呼び覚ます道なのです。その理念を胸に、彼は世界を飛び回りました。国連の潘基文事務総長、エリザベス女王、ゴルバチョフ元大統領など、数多くの要人に茶を点てました。彼は、どんな相手であっても同じ位置に座らせ、同じように茶を差し出しました。そこには、茶室における「平等」の精神が貫かれています。国や立場を超えて、同じ茶を飲むという行為が、互いの心を近づけます。彼はその力を信じていました。また、彼は戦争や和平の象徴となる場所でも献茶を行い、祈りを捧げました。真珠湾での献茶式では、かつて敵として戦った地で、静かに茶を点てました。その姿は、過去の憎しみを超え、未来の和解を願う象徴でもありました。茶の湯は、歴史の傷を癒やすための「祈りの行為」としても機能したのです。

彼の平和思想は、決して大げさな理想論ではありません。むしろ、日常の小さな所作の積み重ねこそが平和をつくるのだという、極めて実践的な考え方もあります。茶室で相手を敬うように、日常でも相手を思いやる心。茶碗を大切に扱うように、地球を大切にする心。そうした一つひとつの行動が、やがて大きな和へつながることを彼は世界中の人々に伝え続けたのです。「空飛ぶ家元」と呼ばれた彼の旅は、単なる文化の伝道ではなく、平和の種まきでもありました。一盃の茶に込められた祈りは、国境を越え、人々の心に静かに広がっていました。戦争の悲しみを知る者として、そして茶人として、彼は生涯をかけて「和の心」を世界に届け続けたのです。

※どなたかこの話を絵本にしていただけないでしょうか

